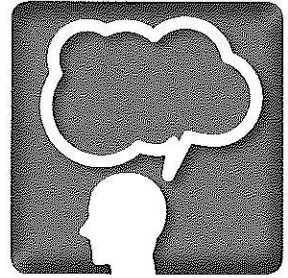


経営(継業)のツボ

理念



転期に立つ経営者の資質の鍛え方<sup>⑧2</sup>

すいとうきよせい  
水到渠成

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

http://www.hayakawa-planning.com  
ブログ: http://ameblo.jp/hayakawa-planning/

水到りて渠成る

「学問の根深うして方に道固し。功名の水到りて自ら渠成る」という中国の詩がある。

学を積みば自然に道が修まるように、水が流れるとひとりでに渠ができるというのが、その意。

ここから、「水到渠成」という禅語が生まれた。

水が流れさえすれば自然に渠ができるが、その水の流れが止まってしまふと、たちまち渠はなくなってしまう。

自然の理を通しながら学を積む(「積学」という姿勢を示しているが、良く考えてみたい。

水が流れるのは源があり、流れ続けることを可能にする水源があるからだ。

だが、雨が降らず、山からの雪解け水が尽き、地中深くからの湧き水が噴き出さなくなれば、水源は枯渇してしまい、水の流れは止まり、やがて渠は跡形もなくなってしまうことになる。

学を積む(「積学」とは「学問の功を積む」ことであり、良い結果を生み出す行為を積み重ね、それを全うするために努力を重ねると

いう意味がある。

季節が到来すれば、雨や山の雪解け水によって水源を充たすことができるが、これは受動的である。

季節に頼らず水源を潤わせるには、地下水が自然に地表に湧き出る泉を確保するか、泉を掘りあてるなど能動的な取り組みが求められる、上に立つ者の姿勢である。

泉から水が絶えず湧き出るように例えた言葉の泉、知識の泉、知恵の泉、教養の泉、希望の泉など数々の泉を用いた熟語からは、枯渇の気配を感じ取ることが難しい。

ゆめゆめ「学問の根浅うして方に道暗し。汚名の水到りて自ら渠成らず」とならないことである。

水五訓

JR東北新幹線のくりこま高原駅前には、直径10m高さ11mもある栗原大風車があり、その傍らに「水五訓」を印した碑文がある。

①自ら活動して他を動かすむるは水なり

②常に己の進路を求めて止まざるは水なり

③障害にあい激しく其の勢力を百倍し得るは水なり

④自ら潔うして他の汚れを洗い清濁併せ容るるの量あるは水なり

⑤洋として大海を充し発しては蒸気となり雲となり雨となり雪と変じ霞と化し凝りては玲瓏たる鏡となり而も其の性を失わざるは水なり

安土桃山時代の武将で、豊臣秀吉の軍師として活躍した黒田如水の作(諸説があり、その真偽は定かではない)といわれている。

また、「水」を「人」と読み替えてみると、人としての根本を説いたものであることがわかる。

①は、自ら模範を示すことや周囲を牽引する力。

②は、自ら考えて道を拓くことのできる力。

③は、困難に直面したとき巨大なエネルギーに転化する力。

④は、大きな目標に向っていくために問われるさまざまな感覚リズム、方法、価値観を排除しないという力。

⑤は、本性を変えることなく変化に対処するために柔軟であることの力。

水を例えた「上善如水<sup>1</sup>」「流水不腐<sup>2</sup>」「水滴穿石<sup>3</sup>」など記してきたが、我田引水にしてはならない。

\*1:本誌2006年10月号本欄参照 \*2:本誌2009年6月号本欄参照 \*3:本誌2011年3月号本欄参照